

銀魂単編小説

Goku

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここで不定期に銀魂の小説を書いていきます

主に戦闘メインで唐突に始まったり繋がったりといろいろ不定な部分があり、例えば勝手に銀時vs神威が始まったりと展開は大雑把ですが、銀魂の小説が好きの方は少しでもいいので見ていただければ幸いです

登場人物

春香時光（はるかときみ）

本名 神奈（かなな）

星海坊主の実の娘で、神楽の姉で神威の妹。

年齢26歳

夜兎であり神楽を上回る実力者。

彼女だけは幼少の頃に地球に来てしまい吉田松陽に拾われ松下村塾に入った。

彼女も攘夷戦争に参加したが初戦で重傷を負い敗退

銀時とは幼少の頃から両思いの関係。

彼女にとって松陽は親そのものであり何としてでも守りたかった。だが銀時は松陽を斬首した事を語るのを恐れて、桂から銀時は戦争から逃げたと誤った情報を渡された。

それもあり10年も銀時を憎み生きてきた。再会すると嘘み合いが続くが自然に銀時は逃げる様な男じゃないと感じた。

やがて銀時の真実を知り銀時に対する気持ちが溢れ万事屋に参加。

將軍暗殺篇を経て銀時が不器用なりの告白を経て結婚。

彼女は神楽同様神威の事を思っている。

地雷亜の弟子でもあり彼女が銀時の本心に気付き始めたのは地雷亜篇以降。

力関係

虚∠酒吞童子∠星海坊主

高杉∠銀時∠神威∠桂∠時光∥陸奥∠神楽∥沖田∠近藤∥土方∠坂

本∠新八

星海坊主と高杉の力関係は不明

詳細

高杉は銀時より一歩上です。攘夷時代では鬼兵王∥白夜叉の関係でした。

ですが高杉も銀時も全盛期より実力が落ちており特に銀時は何年も戦から離れたため高杉よりも弱くなっており特に銀時は何年も戦から離れたため高杉よりも弱くなっており特に銀時は何年も戦から離れたため高杉よりも弱くなっており特に銀時は何年も戦から離れたため高杉よりも弱くなっており

神威は銀時と比べ戦闘経験が浅く尚且つ理由も歪んでいるため劣っています。

桂も戦から退きテロ行為に落ちたため銀時よりも弱くなっています。

時光は夜兎ではありませんが戦闘経験がほぼ無いためやや低めですがそれでも沖田や神楽を上回る。陸奥は夜兎ですがやはり攘夷組に比べて戦闘経験が無いので時光と同格です。

沖田は真選組最強ではありますが彼の戦闘経験は非常に浅く、才能のみでの強さなためまだ銀時等には及ばないです。

それでも星海坊主の娘である神楽と互角の実力者です。神楽と沖田は今後可能性のある人物です。

近藤と土方は同レベルですが2人の違いは近藤はパワーを駆使した剣術を得意とします。

坂本は攘夷戦争を早くに降りたため、かなりの低さに設定しています。

新八は最弱ですが今後最も可能性のある子です。可能性ではこの中で最強です。

目次

銀時 v s 神威	1
高杉 晋助 v s 坂田 銀時 前編	7
高杉 晋助 v s 坂田 銀時 後編	13
星海坊主と高杉の接触	25
酒吞童子 v s 侍と夜兔 序章	28
酒吞童子 v s 侍と夜兔 2章	33
酒吞童子 v s 侍と夜兔 終章	38

銀時 V S 神威

因縁の対決 銀時 V S 神威

トキミの兄、神威と対峙する銀時。前はトキミやケイの助けもあったが、今回は一対一の勝負。

夜兎最強と唄われる神威を目の当たりにしても、銀時は震えるどころか、笑みを浮かべて居た。

目を瞑り、自分がたくさんの人間によって立たされそのために戦い抜く意思を固める。

「さて、てめえの頭がち割るつったろ!!」と言い放ち銀時は洞爺湖の柄を握りしめ飛び上がり、思いを込めた刃を神威へ振り下ろす。

だが神威も幾多の修羅を掻い潜りあの夜王の弟子だ。傘を横にし盾とする。

鋭い音が耳に轟き、洞爺湖の刃と夜兎の傘が激突する。

目を合わせる神威と銀時は笑みを浮かべている。戦場を駆る鬼の笑みを口元に浮かべている。

神威はその強靱な力で銀時を弾き飛ばす。銀時は地面へ徐々にな足を踏ませ、減速し受け身を取る。

だが神威の速度は想像を絶する程早く、その蹴りは銀時へ振り下ろされるも、銀時はギリギリでかわし煙が舞い上がる。

だが神威の猛攻は止まらず、傘や蹴り打撃の連鎖を銀時へ繰り出して行く。

銀時は神威の目を見て、神経を全て尖らせ全てをかわして行く。これが夜兎との戦法だ。相手の目を見て、相手の攻撃と一体化しかわす。

神威は傘を地面へ差し込みその柄を持って逆立ち回転し傘を引き抜き銀時へ打つ。

だが銀時は再びかわし、周囲を煙が包み込む。

流石に視界が眩み、神威は次の手を取れずにいた。そんな神威に放たれた横降り斬撃。神威は咄嗟に左手の平で受け止めると違和感を覚える。「なぜ刃の裏を？」と一瞬の判断が遅れる。そんな神威

の左手を蹴り上げ、木刀の柄を持っていた左手を離し右手で正し方向で握り身体を左一回転させ鋒を神威の顔へ向かわせる銀時。

神威は咄嗟に右手の拳を鋒に突き刺し受け止める。そして、左手で木刀を折ろうとするも再び銀時が左手を蹴りその勢いで後退する。

だがバランスが崩れ立て直す間神威の反撃が開始される。再び傘の鋒を銀時へ向け激突させる。煙が舞い上がり手は手応えを感じない。銀時は神威の傘に乗り上げ、横振りの斬撃を神威の頭部へ放つも神威は頭を下げて躲す。

そして左手のチョップで銀時の顔を殴り、銀時は口から血を出しながら身体が回転しバランスを失うもなんとか受け身を取る。口のすぐ右横に小さな血線が出来上がる。

だが目の前を見ると神威の次なる一撃が振り下ろされた後だった。だが銀時はギリギリで横に飛んで緊急回避するもバランスを失う。再び神威が傘を振り下ろし煙が舞い上がる。

倒れたまま、背が地を擦りながら攻撃の風圧で吹き飛ぶ銀時だが、再びかわしていた。

だが仰向けに倒れた銀時に神威は飛び上がり傘の鋒を向ける。やばいと感じた銀時は顔面へ向かって居た鋒に対し必死に身体をそらせ左肩に傘の鋒が突き刺さる。

だが傘を左手で掴み右手の木刀の鋒を神威の左肩に突き刺し、刺された木刀を神威も左手で掴む。

そのまま修羅の目が向き合う。幾多の戦場を潜り抜けて来た夜兎と夜叉。

神威はその力余る手で銀時の木刀を折ろうとするが、銀時は神威を蹴り上げ倒れた自分からみれば上側へ飛ばす。

神威もバランスを失っていたため成す術が無かったのだ。

二人は起き上がる。銀時は頭の左側から流れ出た血が線を描きながら頬を通り、神威も唇が切れ血がながれていた。

銀時は肩へ突き刺さった傘の物凄い影響のせいか、血飛沫が顔にまで付いている。

「はあ、はあ」

銀時は息を切らしている。人間のスタミナで夜兎に追いつこうとすればするだけ、身体への負担は避けられ無い。

「おい!!」と銀時を呼ぶ声が聞こえた。

銀時は振り向くと、そこに立っていたのはケイだった。銀時へ刀を一振り投げ付ける。銀時は右手で剣を受け取る。

銀時は笑みを浮かべ「きたきた」と口走り木刀の鋒を地面に突き刺す。

そして剣を腰に収め、鞘から引き抜く。その姿勢から感じられる、一人の侍の魂。

右手で剣を持ち、左手で木刀を引き抜く。煙が若干舞い「こっからが本番だ」髪で片目が隠れ、片目と笑みは鬼を連想させる。

神威は笑みを浮かべて「それでどう変わるの？折れる刀が一本から二本に増えただけじゃん。あの男も加勢させたらもつと面白くなるよ」と嘲笑う。

銀時は笑みを浮かべ「てめエら夜兎とサシでやり合う時にア、別の戦法が要るんのだ。まあすぐに分かる」と言い剣の鋒を神威へ向けた。

神威は銀時へ突進し、傘を猛烈なスピードで横振りする。銀時は冷静に、頭を反らし、左の木刀の刃を傘に付け、鮮やかに鋒まで傘滑らせる。受け止めたのではない。受け止めれば猛烈な怪力が身体の疲労を早める。文字通り付けて滑らせている。それも凄く鮮やかに。鋒を通った傘とその持ち主はバランスを失い、銀時はその間に右手の刀を天へ向け、刃を振り下ろす。

神威は何とか後退し、体制を整える。その間に神威の左胸を剣が貫いた。噴水のように飛び出る地血。正確に言えば、左肩と胸の間。心臓へ狙い定められた一撃を歴戦の夜兎の本能が回避させたのだ。

その刀の柄を握る銀時に神威は本能のまま銀時の心臓に鋒を刺しこむ。銀時もまた、攘夷戦争を生き抜いた白夜叉。その本能は伊達じゃ無く、神威と同じ位置に傘が突き刺さっていた。

手を引こうとし無い二人の傷口から血は溢れ出るばかり。だが二人の左手は空いている。神威はその拳を銀時の顔面に向かわせる。

だが銀時は既にこれを見切っており、左手の木刀を迫り来る神威の拳に突き刺す。再び血が溢れ出る。

銀時は木刀を突き刺したままグリツと、木刀を中で回す。尋常じゃ無い痛みが身体に走った神威は左手を自然と退いた。その隙を突いた銀時は、木刀の鋒で神威の額を殴る。

鋭い音と共に神威は背後へ吹き飛び、殴られた箇所が皮膚が裂け血が飛び出る。意識が朦朧とするが、バク転し何とか受け身を取る。

だが目の前には二振りの剣が振り下ろされて迫り来る。夜兎の怪力もあり左腕の肘でそれを受け止める。だが夜兎の皮膚であろうと一振りの刀の切れ味には逆らえず、血が滲み出る。そして右手の傘の鋒を飛んでもない速度で銀時の顔面に向かわせる。銀時は神威の腹を土台にしてバク転して回避。地面へ着地すると神威は銀時へ我武者羅に傘や武術の攻撃を繰り出す。だが銀時はその攻撃と再び一体化し、今度は躲すだけで無く、怪力を刀で受け流しながら、神威の隙を狙っていく。

ガン!!ガン!!と鋭い衝撃と音がその荒野に響く。二人のやり取りはあまりにも早い。

ここまで夜兎と張り合える人間はそう居ない。

銀時はより明確な隙を突き、神威の顔に剣を横振る。咄嗟に傘で受け止めた神威の傘は折れた。生存本能が神威の身体を勝手に後退させ、一撃を躲す。だがその余りにも強力な一撃をかわし切れず、顔の右頬骨から左手頬骨にかけて切り傷が現れる。だが銀時の猛攻は止まらず、再び神威に刀を横振る。神威は左手で刃を掴み、もう片手のチョップで剣を折った。真剣を手で折れる神業は人間には到底できない。これこそが夜兎だと再び感じられる。

だが銀時は左手に持った木刀を上空へ投げ、右手の折れた刀も離れた。意外な一瞬に神威は戸惑った。

――その隙を鋭く突き、折れた刀の柄を左手で一瞬で握りしめ、地から空に向けて剣を振り上げる。神威のへそから右肩まで深々と斬り裂かれる。噴水の様に飛び出る大量の血。だが神威は歴戦の夜兎の中でも最凶を謳われる男。倒れ込む身体を必死に止め、右拳を銀時

の顔面に向かわせた。

銀時も退かず折れた刀を神威のへそに刺しこんだ。そしてそのまま刀をグリッと回し、突き刺したまま神威の横腹を斬り裂いた。「っが」口から血を吐き出す神威。だが神威の拳は退かず夜兎の拳を顔面に喰らい、その衝撃で吹っ飛び、地面へ身体がぶつかりながら岩山に衝突。その衝撃で岩山にヒビが入り、煙が舞い上がった。普通は全身が血だらけになり頭蓋骨が粉々に砕け即死だ。最凶の男の拳を食らったのだ。

煙が晴れると確かに銀時の顔面は血だらけだ。頭から流れ出た血が顔に何本も線を描きながら流れ出ている。

「う、ゴホっ」血を吐き出す銀時。

だが、頭蓋骨は無傷だ。それもそのはず、人間の生存本能は生半可な物じゃない。銀時は拳がぶつかる瞬間、反射的に顔を背後に下げ威力を8割以上減減させて食らったのだ。そして岩山にぶつかる瞬間、ダメージが全て背中に来る様な姿勢を取り、ダメージを更に和らげた。背骨にヒビと頭から流れ出た血飛沫が身体中に付く程の出血だけで済んだのだ。

先も言ったが、本来は頭蓋骨が粉々になり、全身血だらけになって即死の威力だった。

そして神威もまた、あまりのダメージの影響で意識が揺らぎ膝を付く。

銀時は壁に背をつけたまま「はあっ、はあっ、はっ」激しく息を切らしている。

神威は膝を着いたままジンツジンツと痛む傷が身体を蝕み動けずにいる。

「さ、流石は白夜又と呼ばれた男だね…一撃すら当て切れなかった…脆い身体でよくここまでやりあえた」と神威はそんな身体でも笑みを絶やさず、口走る。

銀時は「へ、へへっ…それア俺への褒め言葉か？皮肉か？」と問うと神威は「どっちもだよ」と答える。

銀時は満身創痍の身体で、震える唇で「へっ、アホか、てめエの

全力の一撃顔面に食らってたら俺は既に脳味噌喰べたにブチまけて今頃あの世だっただろうよ。だから面倒な二刀でかわしながら戦うんだよ」と口走る。あまりのダメージに声が掠れている。

神威は笑みを浮かべながら「それは夜兎を褒めてるの？それとも一撃すら当て切れない俺への皮肉？」と問うと銀時は「どっちもだ」と答える。

銀時はそのボロボロの身体で再び立ち上がる。銀時は神威の元へ歩きながら

「さて、宇宙の喧嘩師殿……俺はまだてめエの地獄巡りを地獄に変えられる力は残ってる……このまま続けるか？最もお前にその気力があればの話だが」といつもの憎ったらしい笑みを浮かべながら木刀の鋒を、あまりにも大きい傷の痛みで全身が言うことを聞かない神威の額に、突き付ける。

神威は笑みを浮かべながら「地獄巡りの案内人は確かに頼んだけどこれはタチが悪いね……冥界の案内人じゃあ、俺には刺激が強過ぎたみたいだ」と言葉を零す。

銀時は笑みを浮かべ剣を腰に収める。「なら答えろ……高杉は今どこにいる……」と神威に問う。神威は笑みを浮かべながら「それは本当に分からない。だけど君達化け物の考える事は俺には理解できっこないよ。2人に一度つつ噛み付き、一度つつ負けを食らった俺じゃ、分からないよ」と答える。銀時は笑みを浮かべて「化け物がよく言いやがる」と皮肉の口を叩いてその場を去る。

それと同時に神威は倒れ、意識を失う。

高杉 晋助 VS 坂田 銀時 前編

因縁の対決2 高杉 VS 銀時

墜落した宇宙船の上に見える二つの影。一つは壁に背を付け血塗れの臙。まだ息はある様子だが、相当に状況は良くない。

そしていつもの刀を手に持ち、臙の眼前に立つ高杉晋助。

高杉もまたかなり怪我を負っている。頭から流れ出た血が血線を何本も顔に描いている。

「はあっ、はあっ、はあっ」高杉はかなり息を切らしている。

それもそうだ。星海坊主と臙の連れた夜兎の部隊とたった1人で戦い抜き夜兎を10人以上殺すと言う有り得ない功績を残し、星海坊主と夜兎部隊は別の先導隊と交戦には入り、高杉はそのボロボロな身体で臙と対峙した。

臙を圧倒し、瀕死になるまで追い詰めること鬼神の強さを見せ付け現在に至る。

臙は高杉を睨みながら「おのれ…… 貴様らは一体どれほど俺たちを阻む…… 松陽の弟子たちよ」と問うと高杉はいつもの不敵で不気味な笑みを浮かべながら「言つたら、俺か銀時（あいつ）か、どちらかが必ずてめエを地獄に送ると…… どうやらその処刑執行人はこの俺になったようだがな」と剣を空へかざす。

臙はただただ「やるがいい…… それが鬼の宿命であろう…… だが、お前と白夜叉、何れその首を取る者も現れる」となんの惜しみも無く悲しみも無く紛れもない虚無のまま、高杉に首を斬り落とされた。

高杉は臙の死骸に向け「取れねエよ…… 俺たちを殺せるのは、俺たちしかいねエ」と一言を語った。

高杉は刀の血を振り払う。すると宇宙船の瓦礫から突然トキミが飛び出し夜兎独特の傘を独特の怪力で高杉に振り下ろす。

高杉は即座に反応し、トキミの傘に目に見えないほどの居合いの一撃を浴びせ、折った。

トキミは折れた傘をも武器にしその鋒を高杉の顔面に突き刺そう

とするが、高杉の反応は異常に速く、高杉はトキミの左肩に剣を突き刺しそのままトキミを壁に打ち付ける。

肩から出る大量の血。高杉は笑みを浮かべながら「無理だ、夜兔（お前達）だろうと幕府だろうと俺は殺せねエよ」その獣が迸る目をトキミに向けその言葉を口にする。

トキミは肩に突き刺さった剣の痛みには耐えながら「高杉……あなたは変わった。戦争の痛みを覚えてあなたは狂った。だけどあなたよりも狂うべき者が今再び守る道を歩んでる。あなたよりもこの世界を滅びを願う者が今この世界のために戦ってる」トキミがそう言う
と高杉は「良く言うぜ……」

トキミ、俺たちは松下村塾で共に学んだ。だがな、戦争にすら参加しなかったお前が何か言える口か？いや、10年以上あいつを恨み続けたお前が言える事か…… あいつはそんなお前をも守ろうとしている。そんなお前のためにお前の兄に戦いを単身仕掛けた。お前はそんな奴を何年も憎み続けた……今でもどこかで松陽を殺したあいつを憎んでるじゃねエのか？」と高杉が問うとトキミは「違う…… もう憎んでなんかいない…… もう憎める訳がない…… あんな痛みを抱える人を憎める訳がない」とトキミが言い返すと高杉は「そう言っている……だが人間の闇は決して消えない、お前はまだどこかであいつを憎んでる。俺には見えるんだよ。お前の目に、あいつに対する殺意が……」と高杉が言った瞬間、空から一言が高杉の耳に届く。

「見えてねエよ、お前は何も!!」高杉は目を空へ向けると、上空から剣を構え落下してくる銀時を見た。

「来たな!!」とトキミの肩から剣を抜き同じく剣を構える。

銀時は木刀を両手で握りしめ、高杉へ振り下ろす。

高杉も剣の柄を両手で持ち、剣を縦にして受け止める。

周囲を取り巻く衝撃。銀時はそのまま地面へ着地し剣を何度も振るい高杉を遠ざけた。

高杉は笑みを浮かべながら「ようやく来たか……」と口走る。

銀時は剣を置きトキミをお姫様抱っこして歩き、安全な場所へ座ら

せる。トキミは「銀時……」と言うと銀時は「もう心配するな」と一言だけ言い再び高杉の眼前に立つ。

銀時も相当血を流している。それもそのはず、神威と戦い、そのまま奈落兵と単身戦いながら奈落の船でここまで来た。

消耗仕切っているライバル同士。

「高杉……お前がこいつを語るんじゃないやねエよ…… 例え俺を憎もうが、こいつにとつても松陽は親同然だった。だが真実を知った今、こいつは俺を憎んじやいねエ…… もう目で分かるんだよ」

と銀時が言う和高杉は「なるほどな…… 相当分かり合つたらしい…… だが無意味だ。もうすぐ全ては壊れ全てが終わる……」と高杉が言う。すると銀時は剣を高杉に向け「何も終わらねエ…… 終わるのは…… この長い夜だ」と言う。

高杉は「面白エ…… 夜が終わるのか、世界が終わるか、お前が終わるか、俺が終わるか、ここで最後の蹴りを付けようじゃねエか」高杉は修羅の眼を浮かべた。幾多の修羅を乗り越えた男の眼を。銀時の眼も今は修羅を潜った眼を浮かべている。「上等だ」その一言を銀時は口走った。

そして剣を持った腕を後ろに伸ばし、互いに突進する。

「うおおおおおおおおおおお!!!」

と剣に力を込める二人。その姿は、10年前の攘夷戦争時代、白夜又と呼ばれた銀時と鬼兵王と呼ばれた高杉に、重なって見える。

そして激突する剣は、再び現在の二人を見せる。剣と剣の押し合
い。

銀時はどこか苦い表情を浮かべ、高杉はどこか満足且つ猥笑みを浮かべている。

互いに両手を柄から退かない。高杉は「うおおお!!!」と力溢れる声をあげながら銀時の身体を剣と共に押し始める。

すぎぎ!!と足が地を削りながら高杉に押されていく。

そして高杉はそのまま剣を鮮やかに滑らせ、そのまま銀時の右肩を斬り裂く。

溢れ出る血と共に、後ろに倒れる銀時。そのまま高杉は銀時の顔を

驚掴み、壁に銀時を叩きつける。

「うわあ、あ!!」と銀時の痛み溢れる声が溢れる。頭からの流血は増えるばかり。

高杉はそのまま左手に握れしめた剣の鋒を銀時の顔面へ向かわせる。ヤバいと感じた銀時は咄嗟に左手の平を上げ高杉の剣に突き刺し何とか止める。ぼたぼたち地面に落ちる大粒の血。痛みのみあまり歯軋りをする。

そのまま銀時は額を高杉の顔へぶつけ、目が眩んだ高杉の腹を蹴り後ろへ倒す。

バク転し受け身を取った高杉はそのまま剣を横振り銀時の首を狙うが、銀時は横へ飛んで緊急回避し高杉の剣で壁は斬り裂かれる。

壁が倒壊し周囲を煙が舞う。視界が眩んだ事を利用した銀時は飛び上がり剣を高杉へ振り下ろす。

だが銀時の剣は何も手ごたえを感じなかった。

そして第六感が働き左側に違和感を感じた銀時は剣を盾にするとそこに一振りの剣が衝突する。目の前に居る高杉はそのまま剣を滑らせる。銀時も剣を滑らせそのまま高杉は剣を上、銀時は地面に向けて振り下ろす。

そのまま修羅同士の目は向き合いもう一度互いに剣を横振りをする。

ガキーン!!!と鋭い音が響く。剣がぶつかり合った証拠だ。銀時の左胸に、高杉の腕に小さな切り傷が出来る。

そのまま二人は我武者羅に斬撃を繰り返す。ガン!!ガン!!と繰り返される剣が衝突して行く。互いに剣を全くかわさず、攻撃に徹している二人の身体は徐々に斬られていき、血飛沫は飛んで行く。

それでも二人はやめない。それでも繰り返される斬撃は怯まない。そして銀時は高杉の心臓へ右手で握れしめた木刀の鋒を向かわせ、反対に高杉も銀時の心臓へ右手で握れしめた剣を向かわせる。

戦争を生き抜いた二人の生存本能は異常に高く、無意識に急所をそらし剣は左胸と肩の間を貫通した。

大粒の血がぼたぼたと地面へ落ちていく。

剣から退かない互いの右手。銀時も高杉もそのまま剣の柄を両手で握れしめ、貫通したまま剣を中で動かし、ギシギシと彼等の身体は内部から斬れて行き剣は互いの胸骨へたどり着くとギシ!!と音を立て止まる。

銀時も高杉も口から血が溢れ出て来ている。

互いに胸骨を斬ろうとしている。どっちが先に斬るか押し合っている。

傷口からも口からも血が水のように溢れ出てくる。肺も傷付き、二人とも呼吸困難に陥っている。

このままどちらかが胸骨を斬れば、斬られた者は確実に死ぬ。

それでも高杉も、銀時も笑みを絶やさない。

互いに胸骨が斬れてしまう寸前まで剣を切り込ませている。身体を雷の様に走る強烈な痛みの中、剣は退かない。

そして互いに額をぶつけ合う。何度も何度も。出血は増えて行く一方。

このままだと相打ちを悟った高杉は剣を引き抜き、その深々な傷を剣の柄の下側で殴る。

「ぐお!!」痛みのあまり身体がグラツとし腰が前に曲がった銀時の顔面に拳をぶつけそのまま殴り飛ばす。

地面へ倒れた銀時に向けて飛び上がり、そのまま剣の鋒を銀時へ向け落下。

そして衝突し煙が舞い上がる。そして晴れると高杉の刀は銀時の右脇腹を貫通し銀時の木刀は高杉の左脇腹を貫通している。右手で剣を握れしめた二人は左手で互いの剣の刀身を握りしめる。

銀時は刀身を握れしめた左手を離しその拳で高杉の顔面を殴り飛ばす。倒れた銀時から見れば下側の方向へ高杉は吹っ飛び倒れる。

そして地につけその支えで何とか立ち上がる両者。

「はあっ、はあっ、はあっ、はっ」

呼吸困難もあるせいか二人は激しく息を切らしている。

銀時の服はもうほぼ血まみれになり、顔をも頭からの流れ出た血が太い線を何本も描き、地面にはぼたぼたと大粒の血が落ちていく。

高杉の服もほぼ血まみれになり、同じく顔に頭からの流血が太い血線を何本も描き、地面には身体から出る血がぼたぼたと落ちる。

二人とも笑みを絶やさない。身体が幾ら痛もうと、足が幾ら震えようと、まだ立ち続ける。

立つのもままならないためか二人と中腰。

前編終了

高杉 晋助 VS 坂田 銀時 後編

その死闘を見ているトキミは「やっぱり高杉はスタミナ、剣技、スピード、防護のどれにおいても

銀時を一步上回る。「銀時は押されている……!!?」と銀時が高杉にこの死闘で徐々に押されているのを見抜いた。

トキミは「(加勢した方が……いや、無意味ね。これはあの二人の戦い。私が出しやばっても銀時はその勝利に喜びを得ない。それに、夜兎の喧嘩に人間が口出しするものじゃない、ってよく言われるけどあの二人の戦いには夜兎も口出しできないわ)」と心の中で考えを改める。

銀時も高杉も息を飲み込み、もう一度「うおおおおおおお!!!」と大きな声をあげ互いに突進。再び斬り合う。交わりぶつかる剣と剣。斬られゆく肌、血を吐き出す身体。

全力の斬り合いはただただ周囲に血を撒き散らす。

斬り合いながら走ったり、止まったり、壁を挟んで互いの死角から壁ごと斬ったりと、常人とは思えない戦いを繰り広げる。

絶対に負けられない。信念を守る侍同士の斬り合いは続く。

そして最後に力込めた一撃の衝撃は大きく、二人は後方へ吹き飛び倒れる。

「う、あ」と二人は痛みのみあまり声を零す。

そしてまた辛くもまた立ち上がる。

身体中にある無数の切り傷。深々と斬られる傷は当然かなりの血を吐き出し服を赤く染める。

血塗れの二人。立つのも辛いか二人は中腰。

二人は剣に全力を込め互いへ向けて走り出す。

どうやら最後の打ち合いの様子だ。

「うおおおおおおお!!!」そう叫ぶ修羅同士の剣はぶつかる。

その瞬間煙が巻き上がり、全方位を大きな衝撃が取り巻く。

トキミはずっと見ている。この再戦で勝ったのは誰か。

そして、煙は徐々に晴れる。

すると二人は互いを背に剣を降り終えた体制のまま立ち尽くしている。

銀時は下に振り終え、高杉は横に振り終えた様な体制だ。

左足が前、右が後ろで剣の鋒は地面に向けている。剣を振った右手に力が感じられない。それが銀時。

高杉は右足が前、左が後ろで右手の剣は斜め上に面している。これが高杉。

そのまま二人は動かない。

ブシューウウ!!!と銀時から血が噴水の様に大量に飛び出る。臍から左肩へかけて大きく深い傷ができ、とんでもない量の血を吐き出している。

銀時は口からも血を吐き出しながら倒れる。

ピクリとも動かない銀時。高杉は剣を鞘に収め、妙な、虚しい目で銀時を見る。「俺の完全勝利だ……」そう言って高杉はフラつく身体を必死に動かし歩き出す。

トキミは「銀時オオオオ!!!」と叫びすぐに銀時の元へ駆け寄る。

銀時の頭を膝に乗せ「目を開けて!!!」と必死に叫ぶ。だが銀時は微動だにしない。

トキミは大粒の涙を流す。10年以上この男をただの誤解で憎み、真実を知った後の後悔がまだ残っているにも関わらず再びこの男を好いた。なのに、謝れぬまま、思いを伝えられないまま、その男は自分の膝の上で息を引き取って行く。

「嫌だ……嫌だよ!!!」と大泣きしながら銀時を抱きしめる。

高杉はその慟哭を聞きながらただ歩いて行く。

だがその足は止まる。何かを直感した。何かを再び感じた。

修羅の眼は再び背にする銀時の死骸へ向かれる。

大粒の涙を流すトキミの頬をそつと添える血だらけの手。

銀時は笑みを浮かべながら「バカ野郎……俺ア……死なねエ

よ」声もほぼ枯れ、身体を動かすだけで全身に痛みを感じ呼吸すらままならない。

そんな身体でも、よろけながら銀時は立ち上がる。トキミは銀時を

抱きしめる。「もうやめて!!もうこんな戦いやめて!!!」と大泣きしながら銀時へ嘆願する。

だが銀時は笑みを浮かべながら「これで最後だ……俺の最後の喧嘩だ……頼む、やらしてくれ」と高杉を見ながら銀時はトキミへ言葉を向ける。

トキミはそつと手を引き「最後だよ?そして約束して……生きて帰ると」というと銀時は「ああ、約束だ」と笑みを浮かべながら答える。

トキミは涙を拭き再び戦場から身を退く。銀時は「はあつ、はあつ、ゼエ、ゼエ」と激しく息を切らしながら高杉を睨む。

高杉も笑みを絶やさなまま銀時睨み続ける。

高杉はそつと口を開き「なぜお前はそこまでして戦う?松陽先生の死の重みをお前に背負わせたこの世界に、何の思入れがある?」と銀時に問いかける。

銀時は溜め息を吐き出し「高杉……お前さんにはわからねーよ……俺は誰も斬ってなんかいいエ……もしあの時俺がお前を斬ってもあいつを斬るのと同じだった……ならあいつを斬ってあいつの魂を俺は生かしたんだ……確かにもつとマシな方法があったかも知れねエ……だけどその責任をこの国押し付けてぶっ壊そうと言う腹にはなれねエ……俺はこの江戸で生き、大事なもんを拾いそして拾われた。俺は”江戸で生きる侍”だ」と銀時は高杉に語った。

銀時は、剣の鋒を高杉に向け「この魂だけは、もう誰にも斬らせやしねエ……あいつ(トキミ)のいる世界をもう壊させやしねエ」と決意を新たにす。トキミは松陽の事を言っている様に思えた。だが高杉は知っていた。銀時のこの言葉は誰に向けられているのか。

フラつく身体。痛みが全身を駆け抜けている。出血多量になるほどの出血。霞む眼はまだ宿敵を見続ける。

そして、再び互いに突進し、全力で剣を互いへ横振る。

その衝動はそして双方の剣を吹き飛ばす。獲物を失った侍はそれでも互いの顔面に拳を振るう。

互いの顔面に浴びせられた拳は、その身体を舞う血飛沫と共に後方へ倒れ込む。

だが銀時も高杉も倒れ込む身体をガツと足を踏み込ませまだ身体を立たす。

「ずうおおおおおおおおお!!!」全力を込め、叫び共に二人の拳は互いの顔面へ向かう。!!!

舞い戻る過去の記憶

竹刀で語り合った松下村塾。ただ一人の男の微笑みが銀時、トキミ、桂、高杉の生きる支えだった。

だがその夢は壊れた。天尊衆が引き起こした世紀の大粛清、寛政の大獄。

師を奪われた4人が、仲間を集わせ引き起こした最後の攘夷戦争。だがトキミだけは初戦で重傷を負い、戦争を降りざるえなかった。

そして、3人は戦った。

銀時はその強さで白夜叉と異名を取った。

桂は狂乱の貴公子、高杉は鬼兵隊を率いて、鬼神の如き強さを見せ、鬼兵王と呼ばれる様になった。

最後の大战時、銀時は桂に、もし負ければ、トキミに銀時は戦争から逃げたと伝えてくれと嘆願。そして戦場に自爆する天人が現れ、銀時は右腕を犠牲にし仲間を守った。

だが彼等は仲間を全て失い戦争で負け、天尊衆が高杉と桂を捕らえ、捕縛中の松陽の3人を銀時の前に差し出し、銀時に仲間を斬るか松陽を斬るかを選択を迫られ、銀時は松陽と交わした約束、仲間を守ると言う約束のために、銀時は松陽を斬った。

孤児だった自分を拾ってくれた師の首をその手で斬った。

絶望したまま銀時は歩き、天尊衆の襲撃を受けた。

胸に×字の傷を付けられ、銀時は生死不明になった。

だが銀時はトキミの前で全ての罪を背負い、仲間を守り師を斬り、そのまま行方不明となった。

高杉はそのまま幕府への復讐を止めず、絶対に滅ぼすと誓った。そんな時を過ごし、

そんな過去を送った。

そして今は、トキミは真実を全て知り、高杉と銀時は互いの守るべきものために今は戦い続ける。

殴り合う血だらけの二人。

銀時は右拳で高杉の顔を殴り、右へよろけた高杉を左拳で殴り、そしてそのまま右拳で高杉の胸の傷を殴り、前へ倒れ込んだ高杉の上半身を、膝蹴りで顔を蹴り飛ばし、血飛沫が舞う中高杉は後方へ倒れ込む。

だが高杉はガツと足を踏み込ませまだ身体を支え、銀時の深い傷に右拳を衝突させ、口から血を零す銀時の上半身は前へ倒れ込み、高杉はそのまま銀時の後ろ髪を掴み顔を地面へ叩きつける。血飛沫が舞う中、高杉は地面へめり込んだ銀時の頭を引き抜き、再び叩きつけ、再び引き抜き叩きつける、それを何度も繰り返す血飛沫は飛び散っていた。

銀時は朦朧とする意識の中、両手を地面へ付けその叩きつけられる連鎖を止めた。

そして飛び起き高杉の顔面を殴り後方へ飛ばし自分もそのまま倒れる。

立てない身体のまま、匍匐前進の様な動き、地面へ刺さっている自分の剣へ各々が向かう。

目の前にあるのは高杉の刀。

「うおおおおああああああああああ」と叫びながら、高杉の剣を握り銀時は立ち上がる。

!!!!

反対に高杉も銀時の木刀を握りしめ立ち上がる。

入れ替わった剣に全力を込め、銀時は右へ、高杉も右へ、互いへ向けて剣を振る。

刀身は激突。ぶつかり合う剣 その一瞬 修羅の眼は見合う。そして碎ける剣は、両方。

木刀も、刀も折れる。銀時はすかさず高杉の脇腹に持っている折れた剣を突き刺す。「ゴホッ!!」咳と共に大量の吐血する高杉。

だが高杉はそんな状態でもまだ浮いている自分の刀の刀身を掴み

銀時の左脇腹に突き刺す。そしてもう片方の手にある折れた木刀を銀時の左肩にほぼ同時に突き刺す。

「ガハッ」大量の吐血をする銀時。

だが銀時はまだ倒れず、未だ浮いている木刀の刀身を掴み、高杉も腹に刺さった剣を引き抜く。

短剣で戦う場合、こういう剣の打ち合いに置いて顔面に向かってくる剣。その肘を剣で刺し、痛みのあまり相手は剣を落としそのままそれを掴み相手の腹へ突き刺す高等技術。

修羅の考える事は同じか、互いに剣を握る右手の肘に突き刺す。

噴水のように飛び出る血。痛みのあまり銀時も高杉も剣をそのまま手放し一歩退く。

だがまた前へ踏み込み二人の左拳が衝突。

弱り切ったせいかわ二人の拳は砕ける。

それも皮膚から血が滲み出るほど。また痛みのあまり一歩退く二人。

だがまだ二人は倒れず全力で額をぶつけ合う。

大量に舞う血飛沫の中二人は後方へ倒れる。

静まり返る戦場。

銀時

顔に太い血線が何本もあり口からも血が溢れており、殴りあったせいか顔に皮膚の大きな内出血も多数ある。

身体も血塗れで大きく深い傷が二つ、そして深い傷が多数で出血の量が尋常ではない。

右肘に高杉の刀の下側の部分が刺さっており

左脇腹に木刀の下側の部分、肩に高杉の刀の刀身が刺さっている。

倒れただけで、地面も染まるほどの大量の出血量。

呼吸困難に意識も不安定になっている。

それ以外にも身体に多数の刺された傷がある。

高杉

彼も顔に太い血線が幾つもあり、同じく顔の皮膚も大きく内出血

している。

身体に大きく深い傷が一つ。

そして無数に深い傷がたくさんある。

口からも血を零している。

呼吸困難に陥っている。意識も朦朧としている。

右肘に木刀の刀身が刺さっている。

それ以外にも無数に刀が刺さった傷がある。

二人は左手から手首にかけて何箇所も骨折してる。

「ゴホツゴホツ」「ゴフゴホツ」二人は仰向けに倒れながらも血を

吐いている。

高杉は空を見つめながら「なぜ変えられなかった……こんな運命を……俺ア10年……その疑問を心に持ち続けた……な
んでお前だけがそんな咎を背負う事になった……」

と一言を零す。

銀時も空を仰ぎ見ながら「さあな……俺もわからねエ」と口走る。

高杉は「だからこそてめエがゆるせねエ……なんでこの国のために戦うのかと……なぜ俺を止めるんだ……なぜ倒れねエんだ」と言いながら、震える身体で必死に立ち上がるようにする。

銀時は「お前は見えてねエからだよ……松下村塾、俺たちが共に生きた奴がまだ欠けてるんだよ……そいつ（高杉）を取り戻すまでは俺は止まらねエ……そいつを取り戻すまで俺は、倒れねエよ」と言いながら銀時もまた何とか立ち上がる。

二人の眼は修羅でもない。今は松下村塾の弟子として、二人の眼に迷いは無い。

銀時も高杉も、歩き出す。血がぼたぼたと身体から落ちながら。この墜落した宇宙船で、兵も何人か死んでいる。

その兵の刀を、高杉も銀時も広い握りしめる。

血が流れて、そして意識もふらつき目すらもう全開に開けていない二人。

剣に力を込め、両手で握りしめ、2人の瞳孔も眼も全開し、残つ

酒呑童子はそれほどの一撃を最も簡単に左肘で受け止める。

あの夜兎の一撃を。人間は普通は腕が切れ、そのまま体ごと切られ即死。

それを最も簡単に受け止める酒呑童子。

そのまま酒呑童子は傘の鋒を右手で握り、そのままトキミを地面に叩き付ける。

地面は地割れを起こす程の衝動。

その衝動で、トキミの腹に傘の柄が刺さりトキミも大量の血を吐き出す。

酒呑童子はそのまま「これは珍しい。夜兎か。それも白眼使いの者」と言い、そのままトキミの頭を踏み潰そうとする。

トキミの危機に反応した銀時は身体の傷を忘れ、我を忘れ酒呑童子に剣を振り下ろす。

酒呑童子は刀身を左手で鷲掴み、右手で腰に収めた剣の柄を握り「終わりだー」と一言のみを銀時へ向けた。

銀時は掴まれた剣を右手に残し、自分の左脇腹に刺さった高杉の剣を引き抜き、酒呑童子の右肩に突き刺す。酒呑童子が右手の剣を引き抜く前に。

仮面の口から見える酒呑童子の唇は笑みを浮かべ、剣を引き抜き至近距離に居る銀時に横振る。

だがそれを見越していたのか銀時は酒呑童子の腹を台にしてジャンプして後退する。

だが見越していたにも関わらずあまりの速さに銀時の胸と臍の間に浅い切り傷が付く。

何とか地面へ着地する銀時はあまりの疲労と痛みと精神が負け膝を付く。

トキミは傘の柄が腹に刺さったままもがき、銀時は立ち上がれず、高杉はよろけながら立ち上がり剣を握り酒呑童子の方へ歩いていた。

酒呑童子は笑みを浮かべながら「消耗仕切った君らを処刑しても意味は無いんだがね……だがやらなきゃまた同僚に怒鳴られる」と言い、膝をついた銀時へ歩いて行く。

高杉は「待つ……。」と言いながら倒れた。

酒呑童子は剣を引き抜き、眼前に膝をついて起き上がれない銀時を見ながら、首を斬る前の構えを取る。

銀時は何とか右手を動かし剣の鋒を酒呑童子の顔へ向かわせる。

酒呑童子は刀身を掴み、そのままグツと刀身を握り潰す。

ボロボロになりながら刀は地面へ転がる。

人間にとって剣を握り潰すなど想像絶する事象。

銀時の右手も動かなくなり、首は地面へ向く。

銀時は地面を見ながら目が血走り「(動け、動け、動けっ!!)」必死に心の中で叫んでいる。

酒呑童子は笑みを絶やさず

「やらばだー」

その一言を銀時へ向け、銀時の首を斬る太刀は放たれたー

銀時の表情は無になり「終わりか」と心の中で死を覚悟した。

ガギイン!!

刀と刀のぶつかる鋭い音が周囲を駆け抜ける。

銀時の首に酒呑童子の刀が到達する寸前、それを阻む刀が一振り。

「そうはさせんぞ」

その刀の柄を両手で握りしめる男が口走る。

酒呑童子は「狂乱の貴公子、桂小太郎」と口走る。

酒呑童子の刀を止めた桂は、全力をかけてる影響か汗を垂らしつつ苦い笑みを浮かべ「こいつだけは殺させんぞ」と口走る。

酒呑童子は不敵の笑みを絶やさず「それが何だ」と言うと、自分の刀に少し力を込めると桂の刀にヒビが入り今にも折れて銀時の首が飛びそうになる。

ーその瞬間、酒呑童子の右脇腹を小太刀が貫通する。

その柄を握るのは銀時。桂の腰にその小太刀の鞘が収まっているのを見た酒呑童子は瞬時に、銀時が左手で桂の小太刀を抜き自分の腹へ刺したと理解し「(この男、まだ身体が動いたのか)」と心の中で驚きを零す。

その隙に桂はヒビの入った剣に力を入れ酒呑童子の剣を振り払い、

自身の剣は折れる。酒呑童子も後退する。

銀時は桂を見ながら「ヅラ……」と彼を見てそう言う。

桂は笑みを浮かべて「ヅラじゃない……桂だ」と一言だけ口走る。高杉も何とかもがきながら起き上がり「お前、なんでここに」と桂に問う。

桂は「かつての仲間がここで殺し合っていると聞いてな……観戦に来たつもりが、どうやら事情は違う様だ」と言いながら酒呑童子を睨む。

酒呑童子は「桂、貴様が来たところで何になる……屍が一つ増えるだけだ」と言う。

すると酒呑童子の耳に声が届く。「屍は確かに増えるけど、その長髪君じゃくて君だよ」

その声のする方角へ振り向くと、銀時との戦いでボロボロの神威が夜兔の軍勢を連れてその場に来ていた。

酒呑童子は笑みを浮かべ「ほう、これは珍しい。歴戦の夜兔がこれほど」と口を開く。

神威は笑みを浮かべ「悪いがその今にも死にそうなバカ侍2人は俺が殺すんだ横取りしないでくれよ……そして人の妹にも何してくれているんだい」と銀時、高杉、トキミを見ながら口走る。

酒呑童子は「ほう」と一言のみ口走る。
神威は酒呑童子を見ながら汗を流す。

「この男……戦ったらこの場にいる全員が皆殺しは間違えられない」と神威は酒呑童子の放つ圧倒的な気迫にやられ、思わず心の中で焦る。

酒呑童子は笑みを浮かべながら「なるほど……これほどの人数が命をかけこの2人のサムライを助けるか」と口走る。

「良かろう」と言い、剣を鞘に収めこの戦場を背にする。
去り際に酒呑童子は「気が変わった……君たち2人が全快の時にもう一戦したい」と言い放ちその場を去る。

その後高杉も銀時もトキミも気を失う。

そして神威は銀時とトキミを江戸の病院に入院させ、高杉を連れて

鬼兵隊と合流する。

銀時と高杉はこの戦いで負った重傷で2ヶ月以上昏睡に陥り、怪我も全治3ヶ月を言い渡された。

n
|

|
f
i

星海坊主と高杉の接触

星海坊主と高杉の接触

鬼兵隊の船は先陣を切つてとある墜落したへ向かっていた。そこに星海坊主率いる夜兔軍が襲撃。

鬼兵隊の船は墜落。高杉は単身、歩きながら宇宙船へ向かっていく。

理由は、江戸を1秒で滅せる程の威力を持った宇宙爆弾があるからだ。

高杉は歩いて行く。

將軍暗殺を企ててから半年。今の高杉は鬼兵隊と第7師団の僅かな戦力で江戸を滅ぼす事を練っていた。

何時もの煙管で煙を吐き、笑みを浮かべながら歩いて行く。

高杉の目の前に1人の男が、歩いて来る。

珍しい日除け傘をさし、白い中華服を来て、茶色く大きい布で顔面のみ残して頭全体に巻いており、長い為か背中から靡き、頭の上にはゴーグルを被っている。

その男は何も言わず、高杉も何も言わず、お互いの横を通る。

その男はふと止まり、高杉へ向けて「よう兄ちゃん、ちよいと道に迷ったが、案内頼めねエかい？」と言い放つ。

高杉はいつもの冷酷な笑みを浮かべながら「くつくつく……心配せずとも案内するさ……もうすぐ地獄にな」と口走る。

その男も笑みを浮かべ「ほう……そりやあ行つてみたいもんだね……だがまだ俺の役割は終わっちゃいねエんだ……地獄には付き合えんがお前さんの葬儀くらいには出てやるさ」と言いながらその男は高杉の方向へ向く。

高杉の笑みは絶えぬまま「なるほど……宇宙最強が葬儀に来てくれるなら幸福かもな……だが残念だ。葬儀に来る時間は、あんたも、俺もねエよ……全てはもうすぐ壊れる」と言うとその男・星海坊主へ向く。

2人の眼は今にも噛み付きそうな獣を思わせる。

そんな危険な瞳が見合っている。

星海坊主は傘をたたみ、自分の左肩に傘をおいた。

高杉は笑みを浮かべながらとてつも無い速度で剣を横に振り星海坊主を斬りつける。

星海坊主は笑みを浮かべながら右手で鷲掴みピタッと止める。

そのまま星海坊主は高杉と額を合わせて「兄ちゃん、威勢はいいが、喧嘩売る相手は……見定めた方が身のためだ」と言い放った。

そのまま星海坊主は剣を握り潰そうとするが……。

——高杉は腰におさめた鞘を抜きその先端で星海坊主の顔を殴り付ける。

星海坊主は後退してかわし、間合いをとる。舌打ちしながら高杉を睨み付ける星海坊主。

高杉は鞘を腰におさめて「宇宙最強に喧嘩売る度胸もねエ奴なら……世界なんて取れねエだろう？」と高杉の声はまるで獣の呻き声かのような、危険を感じさせながら星海坊主の耳へ届く。

星海坊主は笑いながら「くつくつく……こんなバカ侍は以前にも見たことがあるな」と言う。高杉も笑みを浮かべ「奇遇だな……あのバカ侍を殺したい奴がたくさんいやがるな」と口走る。

星海坊主は「殺したいんじゃないやねエよ……あのバカを守りたいんだ」と語る。高杉は「ほう……」と口走る。

そして次の瞬間、夜兎族兵士が10人も上空から地面へ降り立ち高杉を囲む。

高杉は「第7師団じゃねエな」と口走る。

星海坊主は「俺の僅かながらの精兵だ……あいつを殺したいならここを潜り抜けてみる」と言い放ち、この場を去る。

高杉は笑みを浮かべながら「うち……とんでもねエ置き土産を置いてったもんだ」と口走る。

そして夜兎兵士10名が全員高杉へ突進する。

しばらくすると、夜兎の屍が10人。

そこに血塗れの高杉が立っている。重傷を負ったが、夜兎兵士10人を単身で倒した。

そのまま高杉は剣をおさめ、目的の場所へ歩いて行く。

酒呑童子 V S 侍と夜兔 序章

酒呑童子 V S 侍と夜兔 序章

小さな島。荒野と森が島を占める。

ここは虚との戦いで使われた島の正反対に位置する。

ここでは今、6人の者が酒呑童子と対峙している。

足を伸ばして座り込み、背後の岩に背を付けている信女。

目の前の敵、沖田・土方と対峙する神威。

傘を支えに立ち上がる時光と神楽。

信女と時光、神楽は立ち上がり酒呑童子と対峙。

土方・沖田は神威と対峙。

だが沖田は酒呑童子から何かとてつもない恐怖を感じ土方へ「土方さん、あんたは女どもに加勢して下せエ……このチンピラシートは俺が引き受ける」と柄にもなく汗を垂らし呟く。

土方はそれを一蹴し「バカか……俺とお前でもやばい相手だぞこの能天気は」と口走る。

沖田は笑みを浮かべ、その眼を土方へ向け「頼みやす」と一言を言い放つ。

その真意を理解した土方は、頷き酒呑童子側へ加勢する。

一対一の人殺しの眼を浮かべる2人。

沖田も神威も持っている剣を、傘の柄を握りしめお互いへ突進する。

そして酒呑童子はとてつもない速さで信女の首を掴みそのまま上へ上げる。

時光と神楽は全力を込めて傘の鋒を酒呑童子の顔面へ向かわせる。

だがもう片方の手で酒呑童子は2人の傘を同時に掴む。

夜兎2人の怪力を片手で簡単に受け止めいる。

そのまま信女を2人へ投げ付ける。

倒れた3人に剣を向ける酒呑童子だが、振り下ろされ迫り来る剣を土方の剣が止める。

全力を込めている土方の皮膚から血管が浮き出て見える。

酒呑童子は笑みを浮かべ「無意味」と呟きそのまま土方の顔面を驚
掴む。

身体へ迸る死への認知と感情。それは恐怖と諦めを一瞬で伴う。
だが地面から時光が酒呑童子の腹を蹴り、間合いを取らせる。

神楽や時光、信女も立ち上がる。4人とも今のやり取りで息を切ら
していた。

酒呑童子は笑みを浮かべ「君ら雑魚が何匹集まっても、私には勝て
ないとなぜ分からない？」と口走る。

土方は悔しさのあまり歯軋りする。

その一方で響く鋭い音。剣と夜兎の傘がぶつかり合っている。

苦い顔をする沖田と余裕を持つ神威の笑み。

神威はその怪力を駆使して沖田を弾き飛ばす。

吹き飛びながら後方にあつた岩山にぶつかり大ダメージを食らう
と悟った沖田はその速さを自慢とする剣技で岩山を斬り裂き、そのま
ま地面へ剣を差し込み受け身を取る。

だが神威のスピードは予想以上に速く、その傘が沖田へ振り下ろさ
れる。

周囲を包む煙。その中で沖田はバク転しながら退避する。

ギリギリで回避できていた。

舌打ちする神威へ、壁走りしながら飛び上がり、勢いを付けた剣を
振り下ろす。

神威も傘を縦にしてその剣を受け止める。

視線すらも違いを殺そうとするほど鋭い2人。沖田は神威の腹を
蹴って飛び上がり間合いを取る。

一方で土方が全力で斬撃を繰り出し、我武者羅に振るその剣を酒呑
童子は軽く肘で受け流していた。

すると酒呑童子の背中へ迫る神楽の蹴り。酒呑童子は左肘で土方
の剣を流しながら右手で神楽の足を驚掴み身動き取れなくする。

両手が塞がった酒呑童子へ飛び上がり、剣を振り下ろす信女と傘を
振り下ろす時光だが、酒呑童子は「甘い」と言ってそのまま神楽を2
人へ投げ付ける。

バランスを崩した3人は再び倒れ、土方は渾身の一撃を酒呑童子へ振り下ろす。

肘で軽々と止めた酒呑童子は土方を蹴ると、土方は途轍もない勢いで吹き飛び岩山にぶつかり吐血する。

目が霞み、頭からは血が流れ出す。

そのまま酒呑童子は剣を抜きその鋒を倒れた神楽の顔面へ向かわせる。

神楽はその一瞬で悟った。自分は後1秒以内に死ぬと。身体から力を抜き目を瞑る。

――次の瞬間、地から天へ振り上げられた一撃が酒呑童子を襲う。

咄嗟に酒呑童子は剣でそれを受け止め、反射的に距離を取る。その一撃を放ったのは神威だとすぐに見えた。

そうしているうちに酒呑童子へ放たれた超速の太刀。剣を盾にして受け止める酒呑童子。

超速の太刀の先には鋭い表情の沖田がいた。そのまま酒呑童子は沖田を振り払う。

その場に居る6人は酒呑童子と対峙する。

酒呑童子は笑みを浮かべながら「神威君、君ら鬼兵隊は私と手を組むんじやなかったのかい？裏で天導衆の崩壊を目論むこの私と」と口走る。

神威はいつもの笑顔を絶やさず「確かに同盟は組んだね、酒呑の旦那……。だけど俺の妹達を殺す条件はいつから入ってたんだい？」と酒呑童子へ問うと「ほう、その小娘達はお前の妹だったのか……。だが残念だがそいつらはここで殺す……。楯突くならお前もただでは済まないぞ」と言い放つ。

神威は笑みを浮かべ「上等……。」と口走る。

沖田は笑みを浮かべて「一時休戦だなチンピラシート」と言い放つ。神威は「ああ」と答える。

剣や傘を酒呑童子へ向ける6人。

酒呑童子を中心に衝撃周囲を取り巻く。「どうやら次元の違いか分からないみたいだ……。良いだろう……。貴様らの屍に教えを授

けてやる」と言い放つ。6人の身体を恐怖が駆け巡る。今まで幾多の戦場を潜り抜けたこの剣でも、この男には届かないかも知れない。そういう感覚を6人は覚えていた。

震える身体を抑え、沖田は「侍の最後の喧嘩、見せてやらア」と口走ると、6人は各々が獲物に力を込め「うおおおおお!!」と力を込めて酒呑童子へ突進する。!!

6人はバラバラに肉弾で素早く攻撃する。酒呑童子はそれを受け止め軽く振り払いその一瞬の隙をついた1人、または2人の同時攻撃が放たれても酒呑童子は余裕と共にそれを裁いて行く。

しばらくそれが続くと、酒呑童子は剣を収め沖田と土方の顔面を鷲掴み、神威と神楽へ2人を投げ付け、そして飛び上がって攻撃しようとしていた時光と信女に素早く接近し、途轍もなく速い居合いの斬撃で2人の横腹を斬り裂く。

2人は吐血しながら地面へ落ちる。

倒れた6人を見渡す酒呑童子は「こんなものか?」と彼等を嘲笑う。6人とも、頭から血を流して倒れている。

その中、神威だけ齒軋りしながら立ち上がり、眼が血走らせる。

そして表情は鋭く、不気味な笑顔は絶えない。

酒呑童子はそんな神威を見て「どうした小僧……死ぬ時となれば夜兎でも恐怖するか?」と問う。

神威は笑みを絶やさず「何を世迷言を……これが死ぬ人間の表情に見える?」と口走って飛び上がり、力を込めた傘を酒呑童子へ振り下ろす。

酒呑童子は片手で刀を握りしめ、その一撃を受け止める。最も簡単に。

酒呑童子は笑みを浮かべながら「なら気でもふれたか?」と神威へ問うと、神威は「ああ……俺がここまでやれるなんて今までなかったから!!」と喋り、傘を我武者羅に酒呑童子へ振り出す。

幾多の戦場を潜り抜け、多くの血を吸った酒呑童子にはそんな攻撃が意味を成さず、かわされたり流されたりと簡単に裁かれて行く。

酒呑童子はそのまま神威の顔面を掴んで地面へ叩きつけてグツと

めり込ませる。「さらばだ」と言い放ち、もう片方の手で握っている剣の鋒が神威の喉へ向かった。

眼前で兄が死と直面しているのを見た時光は「やめて!!!」と騒ぐも、酒呑童子の剣は止まらなかった……。

続く……。

酒呑童子 V S 侍と夜兎 2章

酒呑童子 V S 侍と夜兎 2章

「酒呑童子の耳へ届く「おい」と言う声。

それと共に酒呑童子の顔を殴り、吹き飛ばす一振りの木刀。柄に洞爺湖と書かれたその木刀を握りしめる男、銀時。

銀時は倒れた神威を背にして立ち「こいつは俺のカミさんの兄貴なんだ……殺させてもらっちゃあ困る」と口走る。

時光は思わず涙を流した。誰も来るはずが無い、誰も神威を助けられない、そうあの一瞬で感じた。

だが銀時の木刀はそんな思いを斬ってくれてほっとしたのか涙が止まらなかった。

岩に衝突した酒呑童子は、立ち上がる。酒呑童子の編笠はさっきの一撃で飛んで行ってしまった。

酒呑童子は笑みを浮かべながら「来たか、白夜叉」と口走る。

銀時はそつと口を開け「ああ、てめエの最期を飾るのは、この俺だからな……酒呑童子」と口走る。

酒呑童子は笑みを浮かべ「やってみるがいい、こやつらは既に虫の息……お前1人で何ができる」と口走る。

銀時もまた「確かに俺じゃあどう足掻いてもお前に勝てねエだろうな……だがそれでも戦場から背を向けるわけにやあ、行かないんでな」と口走りつつ、地面に木刀を刺す。

「今からここに残るのは、てめエか、俺の屍だ」と喋りながら腰に収めた刀を引き抜いた。

その姿は凄まじいもので、幾多の戦場を支配した侍の姿勢を連想させる。

酒呑童子は笑みを浮かべながら「面白いじゃないか……」と口走り、右手に持った剣を握りしめ、空振りする。

その風圧は戦場を取り巻く。

また銀時も地面へ刺した木刀を左手で引き抜いた。

酒呑童子の空振りとは、銀時が木刀を引き抜いたタイミングはほぼ同時。

その一瞬で向き合う2人の眼は幾多の修羅を潜り抜けた獣か、それとももつと危険な何かか……一つ確かなのは、人はその眼を見れば身体が竦むだろう。

銀時は飛び上がり「うおおおおおおお」と右手に持つ刀と左手に持つ木刀を握りしめ、力を込めた。
!!!

また酒呑童子の眼も本気になり、その恐ろしく冷酷な笑顔は狂気を伴う。

銀時の力を込めた刀の一撃が、酒呑童子へ振り下ろされた。だが酒呑童子は左手で刀身を鷲掴み、簡単に受け止める。

「動かな……」!?」酒呑童子に掴まれた剣が微動だにしないと感じた次の一瞬、あまりにも速く酒呑童子の剣の鋒が銀時の顔面へ向かった。

銀時は顔をそらせ何とかかわすも、隙のできた銀時の顔を酒呑童子は蹴り上げる。

夜兎よりも遥かに重く、速い蹴りを食らったためか、銀時は口の中を切ったせいか蹴り上げられた顔と共に血を吐く。それもまるで吐血かと思える程の量を。

血飛沫が顔についた銀時は、次の一瞬で眼を開けると、酒呑童子の刀の刀身が振り下ろされ、迫り来るのを目撃する。

銀時は心の中で「もう鳳仙の時の様な間違いはしねエよ」と思い、まだ空中に浮く身体で酒呑童子の腹を蹴り、ギリギリで間合いを取って酒呑童子の一撃をかわす。

空振りとなった一撃は地面へぶつかり煙を巻き上げる。その速く重い一撃は、周囲の視界を封じた。

酒呑童子は何もせずただ立ち尽くすまま。何もせず、ただじつと。次の一瞬、酒呑童子へ振り下ろされる二刀。酒呑童子は一瞬で刀を盾にして防ぐ。銀時は舌打ちしながら「つち、視界を奪っても意味はねエか」と口走る。

酒呑童子は口を開き「真の侍は眼では見えないからだよ」と言い、

とんでもない怪力で銀時を弾き飛ばす。吹き飛ばす銀時はバランスを失う。

銀時は吹き飛びつつも酒吞童子から眼を離さなかった。酒吞童子はとんでもない速さで銀時が吹き飛ばす方向の先に現れ銀時に追い打ちをかけようと刀を振り下ろす。

周囲を包み込む煙。酒吞童子は振り落とした刀身に違和感を感じると、その煙を吹き飛ばし銀時はその刀身に乗るといふ超技を見せ、そのまま酒吞童子の顔面へ剣を振るう。

酒吞童子は上半身を前方へ曲げてこれをかわし、再び剣で銀時を振り払った。

吹き飛ばす銀時はバク転しながら受け身を取り、酒吞童子を睨みつける。

酒吞童子は銀時の眼前に現れる。流星のこの超絶な速度に銀時もはっとなるが、超速の斬撃は銀時へ何の容赦も無く放たれる。

銀時はその一撃を冷静に見極め、そっと左手の木刀を迫り来る刀につけて、鮮やかに滑られせる。

受け止めればこちらの体力がかなり消耗する。一撃を受け止め切れたとしても次の一撃で殺される。

だから体力をなるべく消耗せず、そうやって酒吞童子の刀を木刀で鮮やかに滑らせながら、バランスを失った酒吞童子をもう片方の剣で斬りつける。

だが酒吞童子の人間離れした速度で、銀時にも剣を斬りつけ、二つの剣はぶつかり鋭い音を立てる。

連続で繰り出される酒吞童子の剣を、銀時は攻撃を一切せず、感を全て尖らせそれを見切り受け流したりかわしたりする。

そしてその御合間にできた酒吞童子の隙を鋭く突き、攻撃する。だが酒吞童子も何とかそれをかわしたり受け止めたりする。

そんなやり取りが、そんな斬り合いがしばらく続く。
ガキーン!!!ガキーン!!!そんな鋭い音が周囲へ響く。

それを見る全員は驚愕していた。6人がかりでも全く歯が立たなかった酒吞童子に銀時はギリギリで張り合っている。

そんなやり取りで銀時も少し焦りを見せている。この技術でもかなり苦戦している。

「(くそ……こんなんじや長く持たねエ…… 剣が折られちまいそうだ)」

だが銀時もバランスを崩し、跪き酒呑童子が振り下ろす刀から逃れられない。

「(ヤバイ!!)」銀時は心底から焦る。銀時は死を覚悟し、眼を瞑る。

ガキイン!!! 周囲を取り巻く鋭い音。銀時が眼を開けると、沖田と土方が酒呑童子の剣をそれぞれの刀で、力を合わせて受け止めていた。

酒呑童子が沖田と土方を振り払おうとした次の瞬間、酒呑童子の左肩を銀時の木刀が貫く。

一瞬力が緩んだ酒呑童子を沖田と土方の刀が振り払う。酒呑童子も何とかバランスを取り戻し体制を立て直す。

銀時も何とか立ち上がる。「すまねエな」と沖田と土方へ向ける。

土方は笑みを浮かべ「へっ、らしくねエ事を言うんじやねエ…… お前が謝るタマか」と口走る。

彼等3人の横に神威も立つ。神威は口を開き「女共は気絶させた…… これで心置き無くやれるでしょ、侍」と口走る。

銀時は後方へ振り向くと、神楽、時光、信女の3人は気絶して倒れていた。

銀時は笑みを浮かべ「気が利くじやねエか」と口走る。

酒呑童子は「女がいなくなつて何が変わる?」と問う。

沖田は笑みを浮かべ「さあな」と口走る。

4人は剣を構える。「さあ、宇宙二を、刈り取るとするかねエ」と土方が口走る。

銀時は汗を垂らし、溜息を吐き笑みを浮かべ「はあ、こんな化け物をどう倒せつてんだ?」と口走る。

神威は笑みを浮かべ「同じ化け物が何弱気になつてるんだい、それにあれを倒さなきゃ俺たち仲良く全員皆殺しに合うだけだよ」と言い放つ。

銀時は再び息を吐き出し「前にも言ったがな……」と銀時が言う

と全員汗を垂らし笑みを浮かべ、それに続いて全員で「てめえらと心中だけは御免被る」と言った。

その次の瞬間、酒呑童子は笑みを浮かべ彼等に突進した。

相手の強さを、4人とも把握している。だからこそ、万事屋、真選組、春雨第7師団団長が手を組んだ。

銀時の眼はふと霞んだ。一瞬だけ霞みが消えた。

銀時の眼には、戦場が映った。死体や灰に塗れるこの場所に何度立ち、何度剣を振るっただろう。

となりを見ると、かつての仲間が見えた。桂、辰馬、高杉……銀時の瞬きで、今の光景が帰ってきた。

銀時はどこか、今の仲間を昔と重ねてしまった。悲しげな笑みがこぼれる銀時。

そして眼の前に立つ酒呑童子。

全員汗を垂らす。

続く……。

酒呑童子 V S 侍と夜兎 終章

酒呑童子 V S 侍と夜兎 終章

そして眼の前に立つ酒呑童子。

全員汗を垂らす。

瞬時に動く酒呑童子は、彼等4人の背後に現れる。

全員の首を一瞬で攫おうとする酒呑童子の剣が大きく振るわれる。

神威がその剣を傘で受け止め「見えてないとしても？」と口走ると、もう片方の手の手刀で剣を折ろうとする。

だが神威の手が届くより先に、酒呑童子の蹴りが神威の腹へ直撃する。

「つが」と神威は血を吐き出し吹き飛ぶ。その時酒呑童子の首を狙う剣が一振り。

それを振るう土方、酒呑童子は上半身を後ろへ曲げ簡単にかわす。

前へ戻そうとすると、沖田が酒呑童子の身体にしがみ付き動きを封じる。

飛び上がり、銀時は酒呑童子の胸へ向けて木刀の鋒を向かわせる。

酒呑童子は左足の筋肉に全力の力を込め、その鋒を受け止める。

だが、鋒のほんのわずかな部分が食い込み血が滲み出る。

銀時は瞬息で右手に持つ刀を酒呑童子の顔面へ向かわせる。

獲った。銀時はそう確信した。その刀は酒呑童子の顔に突き刺さる。皆が勝ったと確信した。

だがその淡い希望が碎かれるかのように、酒呑童子は銀時の刀の刀身の3割近くを噛んで受け止め、それを食い砕く。

銀時も驚愕する。臙戦で同様の事を銀時もやったが、酒呑童子はそのまま飲み込んだのだ。

そしてしがみつく沖田の力を超え、バツと上半身を戻し、額を銀時の顔面へ激突させる。

頭部の右側から血が噴き出しながら銀時は地面へ落ちる。

酒呑童子は土方を蹴り飛ばし、沖田を振り払おうとすると、沖田は瞬時に後退し、酒呑童子へ向けて連続で斬撃を繰り出す。

その刀身を親指と中指の間に挟み、沖田の剣は動かなくなる。そのまま沖田の腹を蹴ると沖田は吹き飛び、岩場に激突する。

立てない4人を見渡す酒呑童子。「女がいなくなつて確かに強さに変化は出たが…… 緩い…… こんな程度でよく私に楯突いたものだ」とあざ笑うかのように口走る。

土方は頭から血がながれ顔に何本も血の線が通っている。

神威も2、3本程度だが、胸骨にヒビが入っている。

沖田も土方と同様。

銀時は頭の右側に酒呑童子の額を食らつたため、深い傷ができかなり血を流し、顔の右半分が血線や血だらけになっている。

4人は再び立ち上がる。息を切らす4人。酒呑童子は彼らを見渡す。「まだ立つか」とあざ笑う。

4人は連帯して酒呑童子を囲い、四方から同時に剣や傘を酒呑童子へ振るう。

右側にいる沖田の剣を右手で鷲掴み、正面にいる土方の剣を右足の平で受け止め、裏にいる神威の傘を左手の剣で受け止め、左側にいる銀時の二刀を左腕の肘で受け止める。

全員力を込めても受け止められた剣は全く微動にしない。

そのまま酒呑童子は笑みを浮かべ、身体をとんでもない力で回転させ4人を振り払う。

そしてとんでもない速さで酒呑童子は銀時へ突進し右手の刀を銀時へ振るう。左から右へ振るう酒呑童子に対し、銀時も左から右へ右手の剣を振るう。

剣同士は衝突し、互いに右へ振り終えた刀。

だが粉々になった刃は舞い、銀時の刀が折れていた。そして右脇腹が斬られ血を吐く銀時は舌打ちする。だが痛み能耐えそのまま左手の木刀の鋒を酒呑童子の顔面へ向かわせる。

酒呑童子もその速さをかわしきれずに、その剣は酒呑童子の仮面を砕く。更に頬骨に傷が付き血が舞う中、酒呑童子は左手で銀時の顔を鷲掴み、猛烈なスピードで銀時の背後にある岩場に銀時を激突させる試みをする。

だが銀時も戦場を支配した白夜叉。右手の持つ折れた刀を酒呑童子に顔を掴まれた腕に突き刺す。

ブシュー!!!と血が舞う酒呑童子の力が緩み、銀時はそのまま左手の木刀で酒呑童子の顔を殴り、酒呑童子はそのまま後退する。

顔を掴まれた所為で銀時の頭からの流血が増える。

バランスが崩れた酒呑童子に追い打ちをかける沖田と神威。

神威は全力で酒呑童子の両腕を酒呑童子の後ろに回し、そのまま全力で酒呑童子の両腕を封じる。

そして沖田がそのまま酒呑童子を斬ろうとすると酒呑童子は右手の蹴りを沖田の腹へ衝突させる。

「ガハッ!!!」と大量の吐血をする沖田は吹き飛び岩場に衝突する。

その衝撃で沖田の剣は空中に舞う。

――すると酒呑童子の眼を埃が襲う。眼が眩んだ酒呑童子は一瞬戸惑う。振り上げられた酒呑童子の右足を土方の剣が貫き、そのまま剣を地面へ刺し込ませ酒呑童子の右足を封じる。

酒呑童子は自分の両腕と右足を封じる神威と土方をあざ笑い「その軟弱な剣でどこまで粘る」と問う。

――その問いに答える声の一つ。

「てめエを斬るまで」と言ったその男は、銀時は空中から落ちてきた沖田の剣を右手で受け取り、酒呑童子へ振り下ろす。

酒呑童子は左肩から臍まで深々と斬り裂かれた。ブシュー!!!と噴水のように血が舞う。流石の酒呑童子も血を吐き出す。

そのまま神威と土方が後退し、身動きが取れない酒呑童子に銀時は両手に持つ二刀に全力を込め、酒呑童子へ×字に振るい胸を×字に深々と斬り裂かれた酒呑童子はその衝撃で吹き飛び、背後の岩場に激突し瓦礫に埋もれた。

「はあつ、はあつ、はあつ、はつ」疲労感の所為か銀時は中腰で立ち息を切らしている。

同様に他の3人も。今度こそ勝った。そう4人は確信した。

神威は土方へ向けて「大丈夫かい?」と問うと土方は苦笑いしながら「てめエら化け物と一緒にすんじゃねエよ……この中じゃ最弱

の俺はついていけるか」と零す。

神威は笑みを浮かべ

「最弱？それは勘違いだよ……ここにいる僕らは誰もが”最強”だよ……君（土方）は頭脳において僕らの中では最強……僕は怪力と耐久性で君らの中で最強……あのお巡りさん（沖田）は剣技でこの中で最強……そしてあのお侍さん（銀時）は経験でこの中で最強……あらゆる面で最強の僕等が組んだんだ……負けるはずはない」と語る。

それを聞いた土方はいつものタバコを口に咥えて火を付け、表情が柔らかくなり「分かってんじやねエか」と喋る。

そして瓦礫を退け、血塗れの酒呑童子が立ち上がる。

大粒の血がぼたぼたと地面へ零れ落ち、よろけながら瓦礫から出てくるが、立つ事がままならず跪く。

銀時は跪く酒呑童子へ剣の鋒を向けて「さあどうする……まだ暴れたりねエなら……付き合うぜ大将」と口走る。酒呑童子は血相を変えて「上等」と喋り、バツと飛び瞬息で剣を振るう。銀時もそれを見切り、右手の剣を振り下ろす。

互いを背にし、剣を降り終えた双方。勝ったのはどちらか。

全員を息を飲み込み、見ていた。

――銀時の右手の剣が折れ、刃先が地面へ刺さった。

だが銀時は倒れない。その体制から微動だにしない。

そして酒呑童子の刀の刃が粉々に砕け散り、臍から左肩まで伸びる傷を更に斬られ、より大きく血を噴水の様に飛ばし、酒呑童子は倒れる。

そして微動にせず、酒呑童子の周りの地面は真っ赤な血に染まった。

銀時は笑みを浮かべ「これで満足だろ？……バカ大将」と口走り、折れた剣を捨て木刀を腰に収めた。

そして銀時は時光を抱き抱え、その戦場を背にした。

2週間後

春雨本拠地にて、帝王の座に居座る虚に報告が入る。

酒吞童子が地球で死亡したと。虚は笑みを浮かべ「反撃を開始しましたか……。」と口走る。

| f i n |